

### 第3回あらかわ俳壇

|      |                           |
|------|---------------------------|
| 投句数  | 301句                      |
| 投句者数 | 76名                       |
| 兼題   | 星月夜、芙蓉、ぶどう、花野             |
| 選者   | 佐々木 忠利氏（荒川区俳句連盟会長）        |
| 期間   | 平成28年8月1日（月）～平成28年9月2日（金） |

|    |  |           |
|----|--|-----------|
| 特選 | 一房の葡萄両手に余しけり   | 竹野 美恵子さん  |
| 選評 | 葡萄は五、六月には房状の花をつけ、八、九月には房となり実が熟する。両手に余る一房の葡萄の量感である大きさ、重さがリアルに享受される。平明さを余情とした味覚の秋たけなわの存在感のある句となった。 |           |
| 入選 | ふと父母にゆき逢へさうな花野かな   | 松本 光章さん   |
|    | 剥落のつづく白壁花芙蓉  | 大久保 須美子さん |
|    | 瀬戸内の黒き鳥影星月夜  | 小川 一夫さん   |
|    | 振り向けば花野を渡る風の精  | 水田 京二さん   |
|    | 弟に負けじとぶどう口に入れ  | 一色 由美子さん  |

### 第4回あらかわ俳壇

|      |                             |
|------|-----------------------------|
| 投句数  | 501句                        |
| 投句者数 | 103名                        |
| 兼題   | 立冬、酉の市、落葉、大根                |
| 選者   | 対馬 康子氏（現代俳句協会副会長）           |
| 期間   | 平成28年11月1日（月）～平成28年12月1日（木） |

|    |   |         |
|----|---|---------|
| 特選 | 酉の市この世の間にのまれけり  | 柴田 健次さん |
| 選評 | 鷲神社の酉の市は、煌々と華やかな熊手と人の熱気でまるで別世界です。この句は単に夜の暗さではなく、その明るい光の塊がすつぽりと、現代という時代の間に飲みこまれてしまうような不安を感じます。 |         |
| 入選 | 立冬や切り口白き薪を積む  | 大越 源一さん |
|    | 足元を前頭葉に似る落葉   | 金沢 寛さん  |
|    | 白髪の人黙礼落葉搔く  | 土定 弘積さん |
|    | 落葉降る意志あるものの如く降る   | 西村 悦さん  |
|    | 大根の誂へ向きの切られ様  | 戸矢 晃一さん |

### 第5回あらかわ俳壇

|      |                           |
|------|---------------------------|
| 投句数  | 271句                      |
| 投句者数 | 50名                       |
| 兼題   | 節分、冴え返る、下萌、梅一切            |
| 選者   | 佐々木 忠利氏（荒川区俳句連盟会長）        |
| 期間   | 平成29年2月1日（水）～平成29年3月1日（水） |

|    |   |          |
|----|---|----------|
| 特選 | フクシマの静かな浜辺冴え返る  | 田中 礼子さん  |
| 選評 | フクシマの静かな浜辺と聞けば、ぶり返す寒さを感じる様なあの3.11を思い出す。遅々として進まぬ復興への道のり、離れ離れになって暮らす家族や地域住民への思い、何時になったら本当の春が来るのか。作者の思いの深い句。 |          |
| 入選 | 百幹の竹の静止や冴返る   | 大塚 とき子さん |
|    | 下萌えの色に大地の息吹見ゆ   | 坂本 久男さん  |
|    | 節分の鬼給食を運びくる   | 高安 政江さん  |
|    | 下萌を踏む兄弟の秘密基地  | 吉本 つま子さん |
|    | 老木の幹より清き梅一輪   | 若林 清子さん  |